

新潟県燕三条地域発「燕三条 工場の祭典」ミラノサローネ 2014 に出展
 2014年4月8日(火) - 4月13日(日)
 於：SHARING DESIGN by Miano Makers / 市内会場にて

SHARING DESIGN
 il mondo 3D incontra il mondo 10D



工場の祭典
 Factory Festival

2014年4月、「燕三条 工場の祭典」は、ミラノサローネ期間中に開催されるイベント「SHARING DESIGN」の招待をうけ、同イベントにて、燕三条地域の13の工場と共に“Tsubame-Sanjo Factory Festival” exhibitionを開催いたします。
 「燕三条 工場の祭典」は、日本の中部に位置する金属加工の産地、新潟県燕三条地域の名だたる企業が一堂に工場を開放し、ものづくりの現場を見学・体験できるイベントです。
 日本が誇る金属加工の一大産地である燕三条地域の存在と、この地に工場を構える企業の技術力の高さを伝えるため、三条市と工場の職人が一丸となり「燕三条 工場の祭典」の取り組みを、イタリア・ミラノより世界に向けて発信していきます。
 なお、今回参加する「SHARING DESIGN」は、ミラノ市が保有する元機関車工場跡地の施設「La Fabbrica del Vapore (ファブリカ・デル・ヴァポーレ)」にて開催されます。

“Tsubame-Sanjo Factory Festival” exhibition in SHARING DESIGN by Milano Makers

期間：2014年4月8日(火) - 4月13日(日) 11:00am-24:00pm
 会場：La Fabbrica del Vapore (<http://www.fabbricadelvapore.org/>)
 住所：Via Giulio Procaccini, 4, 20154 Milano, Italy
 会場地図: <http://goo.gl/maps/YqWXs> (Google Maps)
 主催：Milano Makers

燕三条 工場の祭典公式サイト：
 homepage: <http://kouba-fes.jp>
 facebook: <https://www.facebook.com/koubafes>
 twitter: <https://twitter.com/koubafes>

参加企業：

今井ノミ製作所
 玉川堂 (<http://www.gyokusendo.com/>)
 斉藤工業 (<http://www.saitow.co.jp/>)
 三条製作所
 進光鋳製作所
 諏訪田製作所 (<http://www.suwada.co.jp/>)
 武田金型製作所 (<http://www.tkd-mgn.com/>)
 タダフサ (<http://www.tadafusa.com/>)
 梅心子
 日野浦刃物工房 (<http://www.ginzado.ne.jp/~avec/hinoura/>)
 マルト長谷川工作所 (<http://www.keiba-tool.com/>)
 マルナオ (<http://www.marunao.com/>)
 山崎金属工業 (<http://www.yamacold.jp/>)
 以上13社 ※50音順

主催・運営：「燕三条 工場の祭典」実行委員会
 新潟県三条市旭町2-3-1 三条市役所経済部商工課内
 TEL. 0256-34-5511

イベント総合監修：method <http://wearemethod.com/>
 アートディレクション/デザイン：SPREAD <http://www.spread-web.jp/>
 ブックレット編集：BACH <http://www.bach-inc.com/>
 プレス：HOW INC <http://how-pr.co.jp/>
 イベントコーディネーター (ミラノ)：野口祐子

掲載・取材に関するお問い合わせ先

日本国内：HOW INC 担当:小池, 相沢
 TEL. 03-5414-6405 / FAX. 03-5414-6406 / EMAIL. info@how-pr.co.jp

燕三条 工場の祭典

「燕三条 工場の祭典」は、日本の中部に位置する金属加工の産地である新潟県、燕三条地域において、包丁や調理器具、農具、大工道具などの、高い生産技術を誇る工場が、普段は閉ざされた空間であるものづくりの現場を、一斉に開放することで、職人の手仕事や、各工場で実施されるワークショップを通して、一般の人々がものづくりを見学・体験することができるイベントです。

首都圏に人口が集中し、過疎化が進む日本の地方都市。ここ燕三条地域もその例外ではなく、若者は街を離れ、住民の高齢化が進み、工場は雇用や後継者の問題を抱えています。これまで地域活性化を目的に、街では数多くのイベントが実施されてきましたが、その効果は近隣地域までの範囲に留まり、抱えた問題を解決するまでには至ってはいませんでした。このような状況を打破するため、三条市の1人の職人と、東京の外部の相談役で考えたアイデアが「工場見学」でした。残念ながら、燕三条地域には外から集客を図ることができるような観光資源はありません。ただし、日本を代表するような高い技術を持った工場は数多く存在しています。そんな普段は閉ざされている工場を開放し、ものづくりの現場を見学したり、ワークショップなどのアクティビティを体験してもらうことで、一般の人々からプロのバイヤーまで、広く工場の魅力を体験してもらおうと考え、彼らの提案を受けた三条市は、市の1事業とすることを決定しました。

こうして、燕三条地域を日本のものづくりの聖地にすることを目標に、三条市と発起人の職人による、各所へのひたむきな働きかけと、そして、この取り組みに共感した日本で活躍するプロデューサー、デザイナー、プレス、編集者などの協力により「燕三条 工場の祭典」は、2013年の秋に開催されました。会期の10月2日(水)から、10月6日(日)までの5日間、燕三条地域の名だたる企業から合計54箇所の工場がイベントに参加し、日本各地より約1万名の来場者が訪れました。また、テレビ、新聞、ラジオ、雑誌、ウェブサイトなど、数多くのメディアによって、この工場による取り組みが発信され、日本全国に大きな反響を呼びました。

三条市と、その地域に住む工場の職人が一丸となった取り組みの成果として、職人は自ら顧客やファンを開拓し、工場はものづくりの枠を越え、地方都市の観光資源を担う存在となりました。このイベントをきっかけに、ある工場には就職を志望する手紙と履歴書が届き、また、職人になるため、その後、三条市へと移住して来た来場者もいたそうです。

このような成果が評価され、2014年3月には、日本の一般財団法人である地域活性化センターが実施する「第18回 ふるさとイベント大賞」において、選考委員特別賞を受賞しました。

なお「燕三条 工場の祭典」は、2014年10月2日(木)から10月5日(日)の4日間、第2回の開催が既に決定しています。



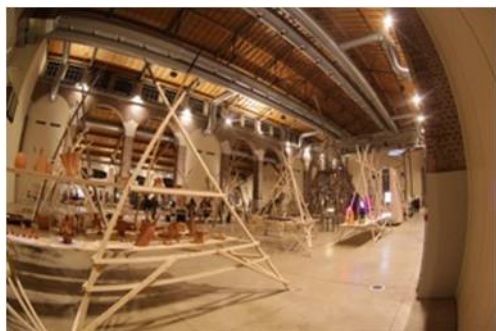
※燕三条 工場の祭典 2013

「燕三条 工場の祭典」公式サイト：<http://kouba-fes.jp>

SHARING DESIGN by Milano Makers

「Milano Makers(ミラノメーカーズ)」は Cesare Castelli(チェーザレ・カステッリ)が代表を務める、職人やデザイナー、アーティスト、その他クリエイターを、評価・支援することを目的とし、彼らの作品や取り組みを社会に向けて発表するイタリアの団体です。

そして、「Milano Makers」が主催するイベント「SHARING DESIGN」は、ミラノ市が保有する元機関車工場跡地をリノベーションした施設「La Fabbrica del Vapore(ファブリカ・デル・ヴァポレ)」で開催されます。ここから「Milano Makers」と「燕三条 工場の祭典」との交流が始まります。



MILANO  MAKERS

「Milano Makers」公式サイト：<http://www.milanomakers.com/>

参加工場（1/2）



今井ノミ製作所

1947年創業。当初から鑿を製造。鋼付けから仕上げまで全工程を手作りで行う。現在、製品のほとんどがアメリカに輸出され、大工や家具職人はもちろん、ログハウスを作る一般の人々にまで、幅広く鑿が届けられている。長切れして粘りのある鋼をつくり、その鋼をいかに生かせるかを、ものづくりの変わらぬテーマとしている。



玉川堂

1816年創業。燕の金属産業の礎である鑄起（ついき）銅器の老舗。当初は、薬缶を手掛け、その後、茶器、酒器、花器など幅広い銅器を製造。創業以来、300人以上の鑄起職人を輩出。2010年には玉川宣夫（玉川堂5代次男）が人間国宝に認定される。1枚の銅板から職人の手でひとつずつ打ち出される銅器は、使うほど手に馴染み、味わいある光沢を帯びる。



斉藤工業

1959年に創業し、ステンレス製洋食器生地の生産を始める。その後は工程の自動化を完成し、現在では、幅広い人々に使うことのできるユニバーサルデザインのカトラリーを製造。50年以上に渡って培ってきた金属加工技術とカトラリー製造のノウハウを生かして、スプーンやフォークなど末永く愛されるカトラリーを食卓に届けている。



三条製作所

1947年創業。創業以前、ドイツのゾーリングゲンに勝る刃物を作ろうと、日本刀を通じて刃物の科学的研究に没頭し、日本の冶金学の権威となった岩崎航介氏が設立。1954年、日本刀の材料である玉鋼を使用したゾーリングゲンに負けない西洋剃刀を開発。その後、日本剃刀、小刀、切出などを製造し、その切れ味は海外でも評価が高い。



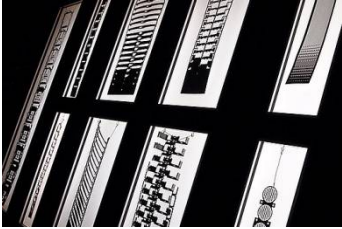
進光鋏製作所

1935年頃創業。当初から一貫して握り鋏を製造。鍛造から成形まで全てひとりの手作業でこなす職人は全国で5人にも満たない。三条市唯一の職人が作る握り鋏には、守町（刃先の鋭い）、長刃（布用）、剣型（手芸ニット用）、網切（網用）等があり、プロにも愛用され、近年ではファッションデザイナーにも愛用されている。



諏訪田製作所

1926年創業。当初は鉄線等の切断に使用する喰切を製造。その後、瓢箪型爪切り、植木盆栽用の刃物、栗の皮むき鋏などを手掛け、近年は、デザイン製の高い爪切りが、日本や海外でデザイン賞を受賞するなどの評価を受けている。伝統技術によって「切る」機能を極限まで高めたニッパー型の爪切りには、職人の高度な技術が集約されている。



武田金型製作所

1978年創業。当初から金型を手掛け、使いやすく、高品質、短納期と時代に合った金型製作を行う。2005年に自社ブランド「mgn」を発足。長年培った製品精度を支える加工技術と、燕三条の金属加工技術にライフスタイルやファッション等のエッセンスを加え、「技術+α」をモットーに、名刺入れをはじめ、金属製品の枠に捉われないものづくりに挑戦している。



タダフサ

1948年創業。当初は曲尺で修業した鍛造技術を生かし、鎌、小刀、庖丁等あらゆる刃物を手掛けた。その後、漁業用刃物を経て、現在は家庭用刃物、本職用刃物、蕎麦切り庖丁などを製造。創業以来、一貫してお客様に「本当に良いもの」を提供すべく、全ての工程を職人の手作業で行い、その一丁一丁に心を込めている。

参加工場 (2/2)



梅心子

1750年頃創業。江戸時代から250年以上に渡り、手作りで小刀や彫刻刀を製造。1860年以後、当時の当主が市場に出した出色の小刀が高く評価され、その子が刀匠から焼入れの秘法を学んだと伝わる。注文に応じて一本一本手作りで仕上げるプロ用小刀や彫刻刀の他、近年では趣味用の彫刻刀作りにも力を入れている。



日野浦刃物工房

1905年創業。当初は鎌を手がけ、その後、鉞などを経て、現在は鉈、庖丁、ナイフなどを製造。創業以来、日本の伝統技術である鉄に鋼を融合する技法により、鋼付けから完成品まで、一貫した刃物作りをしている。欠け難く、研ぎやすく、長切れし、使いやすい刃物に仕上げ、その技術と実用性、機能美の素晴らしさは海外でも高く評価されている。



マルト長谷川工作所

1924年創業。当初は締ハタ等を手掛けた。その後、スプリングハンマーをいち早く導入し、ペンチの製造を始める。現在では作業工具の他、爪切りなどの理美容製品も開発している。熟練の職人の手で一丁ずつ仕上げるなど、一切の妥協を許さない姿勢が、切れ味や耐久性において世界最高峰の品質を実現し、現在20カ国以上で選ばれている。



マルナオ

1939年創業。創業以前は初代が寺社の木彫を手掛けていたが、木工機械を導入し伝統的な手技と革新的なモノ作りで、黒壇等の硬木を使った墨坪車などの道具を製造。現在では箸を中心に製造・販売。その口当たりの良さには定評がある。また、箸だけに留まらず黒檀のスプーンや万年筆等のステーションナリーも製造している。



山崎金属工業

1918年創業。当初から一貫してテーブルウェアを製造し、数々の欧米名門ブランドからOEM生産の依頼を受け、1991年のノーベル賞90周年記念晩餐会でカトラリーが使用される栄誉に輝いた。「THE ART OF DINING」を製品デザイン・開発のコンセプトとし、職人が丹精込めて、隔々までこだわり抜いて仕上げた製品は世界中のユーザーから支持を得ている。

新潟県

新潟県は、日本の中部地方、日本海に面した、面積約 12,500k m²、人口約 233 万人の地方都市です。世界的にも豪雪地帯の 1 つとして知られており、その雪解け水は、日本で最も長い川である信濃川をはじめ、大小の河川に集まり、県内を貫くように流れています。そんな豊かな水源と肥沃な土壌により、日本の主食である米をはじめ、野菜や果物などの農業が盛んな地域で、特に米は日本で最も品質が高い産地として知られており、また、この地で作られる日本酒は、多くの人々に愛されています。

製造産業においては、日本では自動車や家電、重機などの大手製造企業は太平洋側地域に集中していますが、日本海側沿岸に位置する新潟県には、古くからの伝統を受け継ぐ、小規模な企業が数多く存在しています。また、日本政府公認の伝統工芸品、215 品目（2013 年 3 月時点）の内、新潟県内では 16 品目が生産されており、日本の全 47 都道府県単位では第 2 位の数を誇ります。



A : 新潟県



A : 三条市

三条市と鍛冶の歴史

三条市は新潟県のほぼ中央、信濃川沿いに位置する、面積約 430k m²、人口約 10 万人規模の街です。日本で一番社長が多い街と呼ばれ、独立心の強い経営者たちに率いられた、家族経営や数人程度の小規模な企業が多様な製品を作っています。また、社長たちは飲み屋での商談を好むため、人口当たりの飲み屋の数も、日本一と言われています。

遅くとも 14 世紀には、信濃川の水運を利用した市場が開かれ、三条地域の都市が形成されました。侍が活躍した時代には、軍事上における重要な拠点でしたが、17 世紀に入り平和な時代が訪れると、三条の城は江戸幕府により取り壊され、侍は街を去り、それまでの武器に替わって、田畑を開く農具や、度重なる火災で被害を受けた当時の首都である江戸（現在の東京）からの膨大な和釘の需要を受け、鍛冶を専業とする職人が集落を形成しました。また、河川を利用して全国に製品を届けた商人が、各地で発見した製品やニーズを持ち帰り、鍛冶職人に提案を行うことで、庖丁や鋏などの様々な刃物を作るようになりました。三条は長い間、職人と商人が街を治めてきたのです。

現在では、技術の近代化により、鍛造機やプレス機を駆使し、自動車や OA 機器などの機械部品を供給している企業も多い一方で、軟らかい鉄と硬い鋼を合わせて刃物を作る、伝統的な技法を守り続けている職人も多数存在しています。さらに、職人たちはただ伝統を守っているだけではなく、金属顕微鏡などを用いた科学的な検証・知見により、伝統技術を見直し、時代の流れに合わせ、現代の暮らしを豊かにするため、その製品を日々更新し続けています。

デザインの役割

「燕三条 工場の祭典」におけるデザインの役割は、一般の人々と工場の職人の関係をいかに近づけるか、という点にありました。工場は一般の人々にとっては非日常の空間であり、強い興味はあるものの、現場を体験できる、という事実を知りません。また、職人にとっては、工場は日常の風景であり、現場に潜むその価値になかなか気付いていません。この相反する状況を繋げる役割であるデザインとして、工場に馴染みのあるモチーフを、新鮮且つ刺激的なイメージに転換し、両者の中間に置くことを検討しました。

ロゴマークは、普段は閉ざされている工場を開放すること、そして、普段は寡黙な職人の心をも開くことを目指し、「開いた扉」をアイコン化しました。また、これまで鉄の黒と火の赤によって金属加工の産地を表現してきたイメージカラーを、工場の素材や工場自体の色には「シルバー」が多く見受けられることと、金属加工時に使用する炉を覗くと炎に含まれる鮮やかな「ピンク」が目を引いたことから、「シルバー」と「ピンク」に一新。さらに、大きな機械が稼働し、危険な場所が多い工場を、注意しながら見学するイベントであることから、危険を本能に訴える、黄色×黒の斜めストライプパターンの記憶を利用することで「ピンクの斜めストライプパターン」をデザインに採用しました。

その上で、工場の作業で使い慣れている「段ボール」と「テープ」にこれらのビジュアルを落とし込み、簡単なルール（45度のライン、番号をつくる）と共にそれぞれの工場へ配布。職人自らの手により、工場の入口から内部、また近隣を含む街の至る場所に、誘導サインや看板を作るなどの装飾を施して、一般の来場者を迎え入れました。

職人にとっても来場者にとっても刺激的な体験の場となったイベントは、十分な成果を上げることができ、既に第2回の開催も決定し、また、今回海外への展開も決定しました。結果としてデザインが、地域や社会状況に寄り添い、小さな変革の手助けをする、重要な役割を果たした、と言えるでしょう。

